なチュラルラッ☆

桜貝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
なチュラルラッ☆

【Ｎコード】
Ｎ０５９２Ｘ

【作者名】
桜貝

【あらすじ】
別のサイトで投稿していたものを編集しながら投稿していきます。
【あらすじ】鍵垣深紅は超美形の女子高校生２年。外見で想像する清楚な性格とは異なり、正義感が強く勇ましくちょっぴり毒舌な深紅。そんな彼女の普通な日常をあることの目撃とそこへ飛び込んできた男によって一変させられてしまう。ゆる～い仲間たちがおくるなんとも言えない物語です。

―序章―

―序章―

教室の隅。窓際で一番後ろの席という最高の席で帰り支度をしている少女。彼女の名は鍵垣深紅（カギガキシンク）。少しつり上がった大きな瞳、みずみずしく潤った唇、程良くパーマがかかった栗色の柔らかい髪。誰がどう見てもそれは”美人”だった。

「深紅ーあんた今からあいてるー？」

教室のドアにもたれて立っているいかにもギャルっぽい女子が数人。

「ごめん、ちょっと寄る所があるんだ。」

「また屋上行くのー？」

かったるそうに喋るギャルたちとは逆に深紅はヒマワリのような笑顔を浮かべてコクリと頷いた。

最近の深紅のマイブームは此処、桜魅（サクラミ）高校の屋上に上がり、下校時刻ギリギリまで天体観測をすることだった。桜魅高校は深紅が住む地域では最も大きな高校であり、屋上はただの屋上ではない。”屋上庭園”になっているのだ。屋上庭園には管理人によって手入れされた花や木が生い茂り、小さめの噴水やベンチが並んでいる。ちなみにデートスポットだったりするのだ。

ギャルたちは「じゃあ、また今度な。」とかったるく手を振って教室を出て行った。深紅は軽いカバンを持ってギャルたちが帰っていった方向とは真逆の廊下を走り、階段を一段飛ばしで駆け上がる。

『桜魅高校の屋上庭園。西側に自殺希望者発見。』

ジジッと雑音が聞こえた後に女の声がする。

「今日はないかと思ってたんだけどな…。」

とあるビルの屋上。フードを深くかぶったこの男。見た目から高校

生くらいだろうか。フード付きのパーカーにはいくつもの大きなチャックがついており、その袖は手をおろしていると地面についてしまうほど長く、手は隠れている。

『Cランクの任務です。いつも通りに遂行して下さい。』

男は首元についている大きな安全ピンを口元に近づけるとこう言った。

「神の思い通りにはさせない。ナチュラル、行きます。」

―初めまして―（前書き）

主人公、鍵垣深紅は天体観測のため屋上庭園へ続く階段を駆け上がった。鼻歌混じりのそんな気分であけたドア。目に飛び込んできたのはフェンスを乗り越え、今にもとび降りそうなクラスメイト。深紅は慌てて説得するが、必死の行動は彼には届かず……そんな時にアイツが現れた。

―初めまして―

―初めまして―

「君……何してるの？」

此処は屋上庭園。夕焼けに染まる空。それは空一面に血をぶちまけたような、そんな不気味な空だった。

私の声に体をびくつかせる男子生徒。彼は深紅のクラスメイト佐々木という生徒だった。内気な性格で友達は少なく饒舌ではないが、その分真面目に授業を受け、成績もそこそこいい方というハッキリ言ってしまえば、影が薄い生徒だった。

そんな彼が今、靴を脱ぎ、屋上の柵を越え、運動部が部活を行っているグラウンドを見下ろしている。これはもう自殺以外のなにものでもない。

「は、早まっちゃだめだって！」

こんな状況は初めてで、変な汗が次々に額を流れる。

「とっ止めないで！ぼ、僕はいらない人間なんだ…友達いないし…家に帰っても勉強ばっかり…でも、一生懸命勉強しても点数は上がらない…この世から僕1人いなくなっても何も変わらないんだ。」

佐々木くんは足をガクガクと震わせながら自分をかき抱いた。顔色が悪い。よく見れば頬も少しこけているようだった。あぁ、佐々木くんはもう限界だったんだ。なんで私は同じクラスにいるのに今の彼の状況に気付かなかったんだろう。

「そっそうだ…別に死ぬわけじゃないんだ。ただ、此処から飛び降りて死ぬと僕は生まれ変わる…そうだよ、1回死んで新しい僕に生まれ変われば…！」

それが、今の彼の唯一の希望のようだった。目を見開いて笑う彼はもう一瞬目を離しでもしたら飛び降りそうだ。そんな状態の彼に

こんなこと言っていいのか、と悩んだが、その悩みは一瞬で。無意識のうちに私の口は動いていた。
「な……何言ってるの！？生まれ変われるなんてあるわけないでしょ！人はね…死んだらそのまま！生き返ったりしないんだよ！！」
拳を握りしめて猛反発。――けど、私の思いは佐々木くんには届かなかった。
「鍵垣さん…本当にそうなのか、僕が確かめてあげるよ。」
「え…」
彼は飛び降りた。不気味に笑って。私は今目の前で起こった光景が信じられず、ついさっきまで彼が立っていた所へ走った。柵から身を乗り出して運動部たちの歓声でにぎわっているグラウンドを見下ろそうとするけど、それはできなかった。グラウンドを見下ろし、血だらけの彼が横たわっているのを想像して怖くなったからだ。
「……」
足元には綺麗に揃えられた靴。ああ、そういえば彼はとても几帳面な性格で毎日教室の花瓶の水を取り替えてくれていたっけ。『いつもありがとうね。』そう言っておけば良かったな…なんて今更思い、強い後悔の波に襲われる。
「なんだ、私…いつも後悔ばっかり。」
そうだ、あの時も――。遠くでクラクションの音が聞こえた気がした。

「泣いてんの？」
ふと空から聞こえた声に我に返る。随分時間が経った気がしていたが、辺りはまだ夕焼け。いや、少し暗くなってきたかな……そんなことより、今の声は？
「なんで泣いてんの？」
「だっ誰！？」
もう一度同じことを訊かれ、顔を上げる。

「もしかして、この人絡み？」
「……。」
青年だった。黄金の髪に透き通るような青い瞳。日本語が達者だからハーフかな…？いやいやそんなことより、私は目を見開き、口をあんぐりと開けた。青年が浮いている。宙に。そしてその青年におぶさっているのはついさっき此処から飛び降りた佐々木くんだった。
「え、あの…えっと……あれ？」
上手く言葉にならない。というか言葉にできない。なんで浮いてるの？それ、どうやってるの？佐々木くん、なんでおんぶしてるの？…色々な疑問が脳内を駆け巡って破裂寸前だ。
「んー…何言ってるのかわかんないけど、とりあえずきみが言ってるのってこの人でしょ？」
青年は屋上庭園に着陸するとそっと佐々木くんをベンチに寝かせた。
「あ！」
私は慌てて佐々木くんに駆け寄り、生きていることを確認する。そして少しの安堵から脳がリセットされたのか、素直な疑問が口から飛び出た。
「どうやって助けたの？」
「フライアウェイ？」
「は？」
青年はその新品とも言えるような真っ白いパーカーの長い袖をパタパタと上下に揺らしてみせる。…言っちゃ悪いけどこの人、ちょっとおバカかもしれない。フライならわかるけど、フライアウェイって……飛び去ってどうするの。
「…何？それ。」
ふと目にとまった、青年の腹部に書かれた達筆の”うましか”という文字。すると青年はパンとひとつ手拍子をすると嬉しそうに話し出した。
「あ、そうそう！バカって漢字で”うましか”って書くんだってねー！」

「……。」
この人、ちょっとどころじゃない。本当におバカだ。一変に色々なことが起きて色々な意味でため息あ出そうになった、そんな時。
『ジジッ……今日の任務は終了です。ナチュラルさん、お疲れ様でした。』
雑音の後、綺麗な女の人の声がした。
「お、やった。」
「？」
青年は首元についている大きな安全ピンを口元に近づけて了解、と呟くと私に笑いかけた。その優しげな笑顔に不覚にもドキリときてしまう。
「オレ、ナチュラルって言うんだ。きみ、名前は？」
「えっ…あ、私は深紅。鍵垣深紅。」
「かがき…？呼びにくっ」
イラッ。口をとんがらせて言う彼、ナチュラルに不覚にもイラッときてしまう。何、この対照的な不覚の連鎖。

この時、すでに厄介事に巻き込まれていることに私はまだ気付いていない。

―初めまして―（後書き）

まずはこんな感じのお話でしたがいかがでしたでしょうか。というか、今まであとがきというシステムがある所で投稿なんてしたことなかったもので、少々戸惑っております（笑）はたして何をかけばいいのやら……ということで少し雑談。私、桜貝（サクラガイ）は小説が好きです。読むのメッチャ好きです。作るのはご覧の通り、まだまだ素人です。これから頑張っていきます。…あれ！？雑談ってこんなのだっけ！？…私は口下手です。決して饒舌なんかじゃありません。あ、そうだ。アニメや漫画、大好きです。とくにカワイイ子が好きです↑そうですね……そろそろ睡魔が襲ってきたので今日はこの辺でおやすみなさい。↑

―ＫＪＤとＫＨＤ―（前書き）

「泣いてんの？」そんな言葉とともに現れたのは真っ白な青年だった。青年、ナチュラルは持ち前の”お馬鹿”で徐徐に深紅を自分のペースに乗せていく。そんな時、ナユラルは”ＫＪＤ”という”神にそむいて人の寿命を長くする団体”というなんだかよくわからない単語を口にする。”ＫＪＤ”って何？と思いつつも話題は変わっていき…。

ーＫＪＤとＫＨＤー

「オレさーいっつもこういう人を助けなきゃいけないわけ。」
突然自分を語りだしたナチュラルを少し迷惑だと思ったけれど静かに聞くことにした。
「深紅はＫＪＤって知ってる？」
「ケージェー…ディー？」
うん！とナチュラルは人懐っこい笑みを浮かべた。それぞれの場面で全く違う笑い方をする彼にしばし見惚れる。
「”神にそむいて人の寿命を長くする団体”て意味なんだよ。」
「……。」
どうでもいい…なんて流石に言えない。だってすっごい笑顔で話してるんだもん。その笑顔をぶち壊すようなマネ、私にはできない。
「……でも、それちょっとズレでない？」
「え？なんで？」
”ＫＪＤ”、”神にそむいて人の寿命を長くする団体”。それを頭の中で意味もなく繰り返しているとふと気になることがあったのだ。
「だって普通…”神”にそむいて”人”の寿命を長くする”団体”――つまり、”ＫＨＤ”じゃない？」
「あー……ねね、オレお腹すいちゃたんだけど何か持ってない？」
（話題変えた！？）
もしかして自分が考えたのかな？
ぎゅるぎゅるぎゅる――
「！？」
「やっべ、死にそう。」
腹の虫だった。もの凄く大きな腹の虫がナチュラルのお腹から産声を上げた。
「うぎゅぅ。」
変な声を上げる彼は地べたに寝転がり、まるまっている。いくら芝

生の上だと言ってももう夜だ。今の季節、夜になれば気温が下がってくるから芝生に転がれば一気に体が冷えてしまうだろう。……あぁ、そういえば彼は分厚そうなパーカーを着ていたか。それならば寒くはないだろう。

「深紅さん。」

「何ですか。」

「このオレの姿に同情するなら、食べ物を与えてはくれませぬか。」

「しばし待たれよ。」

なんなの、なんなのこの会話。会って間もない、しかもちょっとおバカなこの人のお喋りの空気読んでる私ってなんなの。

とりあえずカバンをあさってみる。私は家に帰っても勉強しないので基本、教科書は入っていない。入っているとすれば弁当箱やパン、ポーチや筆箱、ケータイ、小説など。しかしこういう時に限って弁当は完食（毎日残さず食べているけど）、パンは弁当のボリュームが大きくて買わなかった（案外大食いだったりする）。

「餓死する～。」

「……。」

ほうっておけばいいのだろうけれど、そうすれば本当にこの優雅な屋上庭園に死体が転がっていそうなので諦めずに再びカバンをあさる。

「――――あ。」

良かった。死体が転がるという事態は免れた。私は買ったまま飲み忘れえいた牛乳をナチュラルに渡した。

―ＫＪＤとＫＨＤ―（後書き）

結局はＫＪＤというのが何なのか、よくわからずに終わってしまいました。しかし安心してください。そのうちハッキリわかります

↑

―よく知らない人と天体観測―（前書き）

何故か屋上庭園に入り浸っているナチュラルと一緒に天体観測をしていると、飛び降り自殺を図った佐々木の目が覚めた。泣きはじめる佐々木に深紅は考えなしにこう言った――「おっ男ならしっかりしないとダメでしょ！」。

ーよく知らない人と天体観測ー

「牛乳牛乳牛乳！！！」
「えっ？」
辺りは真っ暗。とうの昔に下校時刻は過ぎ去っていた。
「知ってる？流れ星が流れきる前に願い事を3連続で言うと、不思議なことに……その願い事叶っちゃうんだ！！」
そんなこと知ってるわ。むしろ知らなかったのか。
「でもさ、”牛乳”だけ言ってもわからないんじゃないかな。」
「え？どういう意味？」
「”たくさん牛乳が飲みたい”っていう願い事なら牛乳をたくさん与えてくれるけど、”牛乳”だけだったら牛乳をどうしたいの？で終わっちゃうでしょ？」
「あ……しくじったー！！！」
まあそれを3回言ってる時点でもう遅いだろうけど。それにしても美味しそうに飲んでたな、牛乳。それはもう新しいボールを与えられた小さな子供のような無邪気な顔で。…よっぽど喉かわいてたんだなぁ。
　私たち2人は何故か一緒に芝生の上に転がって天体観測をしていた。私はもともとそのために屋上庭園へ来ていたんだけれど、ナチュラルは違う。なんでずっとここにいるんだろう？
「ん……？」
「あ。」
「おっ！」
「…あれ？ここは……。」
随分遅いお目覚めで自殺しようとこの屋上から飛び降りたクラスメイトの佐々木くんが起きあがった。寝起きで頭が回転しないのか、ボーッとしている。そんな彼に歩み寄ったのはナチュラルだった。
「ねーキミ。気分はどう？」

「え……気分…。」
初め、きょとんとして笑いかけるナチュラルを見ていた彼は徐々に顔から血の気が引いていった。そして震えだす。
「なんで……なんで生きてる！？僕……生きてる…！」
ボロボロとこぼれる涙で佐々木くんの顔はたちまちぐちゃぐちゃになった。なんだろう…彼は、随分変わったように見えた。彼が飛び降りる前と今。そういえば、彼は最初メガネをしていたっけ。落ちている時にはずれたのだろうか、今はしていない。でも、変わったのはそれだけではなかった。”人”がかわったのだ。
「なぁ、今嬉しい？」
「え…？」
「それは嬉し涙？」
「……。」
「飛び降りて落ちてる時、怖いって思ったでしょ？」
「！！」
ナチュラルの透き通る青い瞳が震える佐々木くんを映す。
「後悔したでしょ？」
「……はい。」
声までも震えている彼にナチュラルはヘラッと笑ってぽんと肩をたたいた。
「その後悔忘れんなよ！人は生きてなんぼ！笑ってなんぼ！どんな辛いことがあってもそれが自分の人生！自分の人生は自分のもの！…自分の大切なもの、奪われたらどうよ？」
「悲しい…です。」
「だろ？だから自分の人生を”この世から僕1人いなくなっても何も変わらないんだ”なんて言葉なんかに奪われんなよ。」
「！」
またひとつ、新しい涙が佐々木くんの頬を伝った。
「でも僕……僕なんか…！」
「佐々木くん！」

「！　か、鍵垣さん…。」
佐々木くんは大きな目で私を見た後、罰が悪そうに視線をそらした。
「……。」
あれ？言葉が出てこない……というか次の言葉なんて考えてもいなかった。
「あ、えーと……おっ男ならしっかりしないとダメでしょ！」
シーン。
「あっ…その…」
ほんと、私ってバカ……。
「ぷっ」
「ぷ？」
「あはっ…あはははは！！」
「！？」
「おぉー笑った笑った。」
何故か顔を真っ赤にして笑い転げる佐々木くん。ナチュラルは感心したようにパチパチと手を叩いた。
「……何か面白いこと言った？」
「ははは…あはっ……あ、ご、ごめん。なんか鍵垣さんがそう言ってくれてすごく嬉しくて。」
「こんなこと言われてどこが嬉しいの！？」
「え？でも大抵の男子は喜ぶよ。」
「え…？」
「あれ？もしかして知らないかな…”深紅ラブ”」
「深紅…らぶ？」
とてつもなく嫌な予感がするのは私だけだろうか。
「鍵垣さんのファンクラブだよ。1年から3年まで男女問わず会員がなんと全校生徒の4分の1以上。ちなみに僕も会員なんだ。」
「4分の1以上！？」
「鍵垣さんって可愛いし、スタイルいいし、性格もいいしで皆から人気あるんだよね。今日だって何人か入部希望者が部室にきてたよ。

」
「部室あるの！？」
「うん、だって正式な部活動だもん。」
絶対違うと思う。
「へぇー深紅ってすごいんだ。」
今まで黙って聞いていたナチュラルが会話に入ってきた。すると、途端に佐々木くんは表情を険しくしてナチュラルに詰め寄る。
「あの、すいません。」
「ん？何？」
「もしかして……鍵垣さんの彼氏ですか？」
「え。」
「！！？？　ちっ違うよ！そんなんじゃないから！ていうか今日初めて会ったし！！」
「さあどうかなフフフギャッ！」
「変な所で空気読むな！！」
余計なボケをいれるナチュラルを反射的に殴りとばした。
「……お…おおおお！！鍵垣さんのパンチだあああ！！」
「！？」
なに、なんで興奮してるの。
「これは大スクープだ！！また新しい鍵垣さんを発見したことを皆に報告しなくちゃ！！」
「えっ？ちょ、佐々木くん！？」
クラスメイト、佐々木典史（ノリフミ）は恍惚とした表情をして屋上庭園を去っていった。
「……今までのが嘘みたい…。」
本当に自殺しようとしていた人なんて思えない。
「良かったじゃん、また生きることになって。」
「！」
復活が早い……だと？ヘラヘラと笑っているナチュラルは嬉しそうに体を揺らした。そして次にベンチへ腰を下ろすとダラリと背もた

れにおもいっきりもたれた。
「それにしても、今回の任務完了しそこねたよー。」
「どういうこと？」
「オレの任務、自殺志願者を助けてこれから生きる道を与えること。」
「ふぅん…？」
「でも今日のオレの成果は助けただけ。生きる道を与えたのは深紅だから。」
「え……。」
佐々木くんに生きる道を与えたのは私？
「でも、私何もしてないよ。」
そう言う私にナチュラルは首を横に振った。
「たしかに深紅は何もしてなかったかもしれないけど、佐々木くんにとっては深紅の”存在”が生きる道だったんだよ。」
「私の、存在……。」
……それってファンクラブのことだよね……佐々木くんには悪いけど、複雑だなぁ…。
　ナチュラルがヘラッと笑ったその時、ジジッという雑音がして次に綺麗な女の人の声がした。
『ナチュラルさん、帰りが遅いですが、どうかされたんですか？』
「あっ！ごめん！つい話しこんでて！」
慌てた様子で首元についている大きな安全ピンを口元に引き寄せるとナチュラルは苦笑した。
『そうですか。何かあったのではと心配しました。』
「ほんとごめんなー。」
『問題ありません。それより今日の結果報告で皆さんお揃いですのでナチュラルさんも早くおいでになってください。』
了解。ビシッと声の主に敬礼をしたナチュラルは私に向き直った。
「深紅！今日はありがと！すっげー助かった！」
「いや、私は何も…。」

「そんじゃまた今度！」
「え？今度？」
また会えるの？と訊く前にナチュラルは踵を返して走りだしていた。
「……また会えるのって…。」
この短時間でまた彼に会いたいと思っている自分に驚いた。そして、
この短時間でこんなにも距離を縮めていた彼にすごく驚いた。

―よく知らない人と天体観測―（後書き）

お疲れ様でした。長かったので読むの大変だったと思います。はてさて、今回は深紅にファンクラブがあったことが発覚しました。微笑ましいことですね。…え？微笑ましくない？まあこれも青春ということで…。

ー疲労、そして疲労ー

「疲れた～！」
ボスリとベットに倒れ込む。
私はナチュラルと2人で天体観測を小一時間ほどしたあと屋上庭園で彼を別れ、なんだかよくわからない達成感を感じて帰宅した。
「……夢みたいだったな…。」
枕に顔を埋めて数十分前のことを思い出してみた。
放課後まではいつも通り、なんの変哲もない高校生活を送っていた……けれど、その平凡ながら幸せな生活は私の最近のマイブームである屋上庭園での天体観測のせいで崩壊した。いや、崩壊して良かったのだ。むしろ天体観測がマイブームになったのはこの日のためだったのだとさえ思う。なぜなら、人の命をひとつ助けることが出来たのだから。
いつも通り屋上庭園に行けばそこには先客がいて、その人は彼女などつれておらずにただ1人グラウンドをぼうっと見下ろしていた。ここは学校内唯一のデートスポットということでカップルがよく来るから1人でいることは凄く珍しかった。……つまり、ここ最近いつも屋上庭園に来ている私は珍しい人間だということになる。
そんな珍しい人間であり、靴を綺麗に揃えて柵を越え、グラウンドを見下ろして立っている私のクラスメイトの佐々木典史（ノリフミ）くんは自殺しようとしていたのだ。なんとか説得しようとした私だったが、その努力実らず佐々木くんは不気味に笑って飛び降りた。
「佐々木くん……辛かったんだよね…。」
佐々木くんは『僕1人いなくなっても何も変わらない』と言っていた。それを長い間思い続けて辿り着いたのが自殺という選択。しかし、彼はこの後どこからともなく現れたナチュラルというフワフワしたおバカな青年に助けられるのだが……そして嬉しいことに再び自分の力で地面を踏みしめた佐々木くんは”生きている”というこ

とに泣いて喜んだのだった。
「”深紅ラブ”っていうのには納得いかないけど…。」
生まれ変わった佐々木くんに”生きる道”を与えたのは私だった。自分では何もしていないと思っているのだけれど、ナチュラルは私の存在が佐々木くんに”生きる道”を与えたと褒めてくれた。そしてその”生きる道”に出てくるのが”深紅ラブ”という私のファンクラブ。その時初めて知って驚愕したのでけれど、桜魅高校全校生徒の4分の1以上の生徒がその正式部活動の部員なんだとか…。喜ぶべき所なのだろうが、素直に喜べないでいる私だった。
兎にも角にも、命を救えて本当に良かった。しかもこの私が役に立てたなんて、とりあえず自分を褒める。
「よくやった、私。」
そう呟いて仰向けになると視界の端にはためくカーテンが見えた。窓開けたかな？と不思議に思いながらも開け放たれている窓を閉めにベットを降りようとした、その時だった。
「ばんわー。」
「……。」
ヘラヘラ。
何コイツ。何なのコイツ。なんで今日1日で同じ顔を2度もみないといけないの。ていうかなんで当然のように私の部屋にいて椅子に座ってんの。
とりあえず侵入者（＝ナチュラル）が窓を開けたのだと確信した。
「あれ？もしかしてイライラしてる？」
「わからない。けどたぶんその感情に近いと思う。」
「そっかー……あ、そうだ！チョコあげるよ！」
「チョコ？」
「暦んにさー深紅のこと話したら何かお礼をしてきてくださいって言われちゃってさー…」
「こよみん？」
うん、と言いながら白いパーカーにいくつもついているチャックの

うち、左肩についているチャックをあけ何やら取り出した。
「これ！ちょうど深紅イライラしてるから丁度いいだろ？」
「……板チョコ。」
差し出された板チョコを受け取る。ホワイトチョコだった。
「ほら、イライラしてる時には糖分が足りないからって言うでしょ？」
過剰に摂取しすぎてもイライラするらしいけど……まあ1枚ならいいのかな。
　せっかくだから貰ったホワイトチョコを半分にして片方をナチュラルにあげた。そうすれば予想以上に目を輝かせ袖で隠れた手でそれを受け取る。
「ていうか何で居場所がわかったの？」
「ふっ、それは調査というやつだよ深紅くん。」
かっこつけてるわりには口元にホワイトチョコの欠片がついててさらにおバカに見えるよナチュラルくん。
「調査って？」
「訊きこみ調査さ。深紅ラブ会員の人たちに協力してもらってねー。」
「……ファンクラブの人って私の住所知ってるの？」
「うん。でもそういうプライバシーを知ってる人は会員ナンバー1．2．3の人だけなんだって。」
「へぇ……。」
米粒を半分にしたくらい安心した。
「それでさーその人たちに深紅の住んでるとこ教えてって言ったんだけど、それはプライバシーの侵害ですって中々教えてくれなくて……。」
あなたたち3人で十分プライバシーの侵害だということに気付いてほしいものだ。
「それで典史に相談したんだけどさ。」
「いつの間に呼び捨てで呼ぶような仲になったの。」

……そういえば私も最初から呼び捨てだったか…。
「典史ってほんと良い奴だよな！『命の恩人であるナチュラルさんのためならば仕方ない』つって深紅のブロマイドくれたんだ！」
「へぇ、そう……じゃなくて何で私のブロマイド！？それ盗撮だよね！？私そんなのがあるなんて全然知らなかったんだけど！！」
仰天してつい声が大きくなってしまった。まあ、椅子に座っているナチュラルを見て言ってるから仰天とはいわないのだろうけれど。
「チョコ、いる？」
「いらないっ！」
このイライラは糖分が不足しているわけでもなく、逆に過剰摂取しているわけでもないっての。しかしいつまでもイライラしていると話が進まないと思い、なんとか怒りをおさめ先を促した。
「それで、なんで私の家の住所とその……ブロマイドが関係あるの？」
言ってて恥ずかしくなってくる。アイドルっていつもこんな思いをしているのだろうか。
「それはですね……なんと、そのブロマイドを3人に見せるとなんということでしょう！」
大袈裟に手を広げる。
「すぐに住所教えてくれました！」
「私を売って私の住所を買ったのか！」
「だってお礼しなきゃだったし……。」
そう言ってホワイトチョコをかじる。
「……まあ、それはいいや。もう終わったことだしね。……そういえば」
少々鬱気味になりながらもふと気になったことを聞いてみる。
「そのブロマイドって、何してる時の私が映ってたの？」
「スクール水着きてた。」
ボグッ！！

ああ、ごめんね佐々木くん。今すぐきみを殴りとばしたいと思ってしまった私を許してほしい。ていうか逆に謝れこの変態。

「もう、ほんと鬱病になりそう。」

再びベットに倒れ込み枕に顔を埋めた。

「……う…」

しばらくして、ぬいぐるみが顔面にクリーンヒットして椅子から転げ落ちたナチュラルが起きあがった。

「うあああっ！オレの板チョコオオオオ！！！」

「！？」

「うあ…うあぁ……」

どうやら椅子から落ちたことで食べかけの板チョコが砕けてしまったらしい。ナチュラルはその粉々になった板チョコを拾い集めていた。そして、

「……溶けた…溶けたあああっ！！」

「……。」

黒いカーペットに完全に染み込んだホワイトチョコレートは洗ってもとれなかった。

ー疲労、そして疲労ー（後書き）

こんにちは。今回は前回までのお話をおおまかにまとめてみました。そしてナチュラルのおバカさと、深紅ラブの活動内容がわかりました。次回は新キャラが出てくる予定です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0592x/

なチュラルラッ☆

2011年10月29日15時13分発行